虚偽について

今田竹千代

On Fallacies

Takechiyo Imada

1. Introduction
2. Logic and Dialectics
3. Is “Petitio Principii” A False Inference ?
4. Various Kinds of Falsehood.

1. まえがき

人間に哲学的思索が始まって以来、真偽の問題は、善悪、美醜の問題と共に、常に問題とされ続けて来たことは、あまねく人の知るところである。さて真偽の問題は、主として論理学の解決すべき問題であるが、真偽の問題に入る前に、その解決者である論理学そのものについて検討を加える必要がある。一体論理学はただ一種類しか存在しないのであろうか。あるいは多種多様の論理学が認められるのであろうか。多種多様の論理学が認められるならば、公理系の異なった論理学の間には、真偽の解釈は自ら異なったものとならざるを得ないであろう。ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学が相並んで存在し得るように、規約を異にする多種多様の論理学が許されるならば、単に空間形式の問題とは違い、一切の学の基本形式を対象とする論理学だけに、真偽の問題について相反した答えが出された時は、重大問題といわねばならない。

今日論理学と呼ばれているものには、いろいろの立場の論理学が含まれている。アリストテレスのオルガノン以来もっとも古くから論理学と呼ばれて来た形

式論理学を始めとして、近来発達して来た認識論（対象論理学と呼んでもよい）や弁証法、さらに現代特に注目され始めた数学的論理学（記号論理学）や文法論理学等を加えて考えると、すくなくとも数種類の論理学が存在する。今これらを一応整理して見ると、認識論とその他の論理学に二大別することが出来よう。認識論は対象の認識が構成されるための主観的、客観的諸条件の対応関係を研究するものであるから、この立場においては、真偽は主観と客観の対応性の中に認められる。したがって対応を欠くことは虚偽と呼ぶことになる。このことはその他の形式的論理学にとっても常につきまとう問題であるから、ここで記憶に留めておく必要がある。

さて認識論以外の論理学は一応すべて形式科学であるといつてさしつかえない。これらは、形式論理学であれ、数学的論理学（記号論理学）であれ、さらに弁証法であれ、いずれも純粹思惟の形式やその記号による表現を対象とするものである。その基礎においては常に実在との対応を必要とするものではあるが、一応は純粹思惟の公理的規約とその展開された諸形式だけを当面問題にするだけである。認識論は別名対象論理学と呼ばれるだけあって、その立場では、真偽は実在との対応性の中に求められたが、認識論以外の論理学はいずれも形式科学と呼ばれるだけあって、規約として定められたいくつかの公理とその上に立つ思惟の諸形式相互の間に自己同一性を常に維持すれば、真が確保されるのであり、これが維持されなければ、偽となるのである。認識論も形式科学としての論理学も、同じく真を追求するものであるが、以上のように考えると、認識論の求めるものは「真実」であり、形式科学としての論理学の求めるところは「真理」である。これに似た区別をしたものにライプニッツがある。彼は「理性の真理」と「事実の真理」とに分けたが、わたくしは真理と真実とに区分するのである。形式科学としての論理学の世界においては、純粹思惟は若干の公理的規約が与えられると、それ自身独自の体系として自由に自己展開を進めて行く。したがって純粹数学に例をとれば、数の展開は、実数のごときものも虚数のごときものも成立させるのであって、当初から常に実在性をもった数が展開されるとは限らない。もっと卑近な例では題意に不適当な非実在的な根は棄て去られるのである。すな

わち非実在性がそこでは虚偽なのである。認識論上の虚偽は一応説明したが、次に形式科学としての各種の論理学内部の問題に入って行こう。

形式論理学（古典論理学）も数学的論理学（記号論理学）も弁証法（弁証法的論理学）も、純粹思惟の形式を対象とすることには変わりはない。さらに形式科学として忘れてならないものに数学がある。数学は他の何物にも増して雄大莊嚴な純粹思惟の形式科学であって、現代のテクノロジー文明の基礎をなし、数学を抜きにしては現代文明は理解出来ない。さて次にこれらの形式科学の相互の関係を明らかにし、その真偽観を解明しよう。

まず数と形式論理学との関係であるが、永らく別々の道を辿って、近代まで別々の科学として発展し、両者が別個の科学であると考えられて来た。しかし今日は事情は全く異なっている。多くの専門学者の知っている通り、ラッセルは、その名著「数理哲学入門」第15章「数学と論理学」（194ページ）において次のように述べた。「論理学は数学の青年であり、数学は論理学の成年である。」今日では数学と論理学は別個の科学でなく、純粹思惟の連続的な自己展開の段階的差異と考えられている。少なくとも専門学者の間では、これを別個の科学として取り扱うものはほとんどいないというのが現状である。特に形式論理学がブール、ラッセル、ホワイトヘッドその他によって、記号化されるにしたがって、形式論理学は一層数学化され、逆に数学の全体系が論理的基礎の上に立つことを明らかにするため、ラッセル、フレーゲ、ペアノ、ヒルベルト等が、数学の論理学化を試みるにいたって、両者は兄弟関係どころか、¹ 実は大人と子供の関係という一体的連続性が明らかになった。かくて形式論理学（古典論理学）も数学的論理学（記号論理学）も、数学一般も同じ根から出ている樹木に他ならないことが明白になった。

以上によって形式論理学から数学的論理学を経て数学一般にいたる純粹思惟の連続的体系が確立されるにいたったが、それぞれの特色が全部廃棄せらるべきものとは考えられない。否むしろそれぞれの段階においてその特色は一層発揮されるべきである。形式論理学においては、判断や推理の基礎となる概念の本質の研究、判断、推理の文法学的および言語学的研究は、概念、判断、推理の心理学的

研究と共に一層深められる必要があり、論理学が一方において記号化され、抽象化されると共に、その他方において、内容的に、文法学、言語学、心理学の力をかりて解明すべき部分が多いことを否定し得ない。それと同時に、形式論理学が古典論理学として無条件に継承している部分を、新しい論理学の立場から深く分析する必要がある。形式論理学、数学的論理学、数学は、形式科学として真偽については異なった立場に立つものでなく、同じ規約の上に立っている。すなわち自己同一性、無矛盾性、排中性等を体系の基礎にある公理として出発する。しかし形式論理学の各部門を詳細に検討を加えるとこの公理と矛盾するものを含んでいないであろうか。他方経験数学が、かつての経験幾何学と同じく、純粋数学に進むには、一層厳密に論理化される必要があるごとく、形式論理学は、古典論理学として多分に経験論理的な要素を含んでいるがゆえに、妙な表現ではあるが、論理学の論理学化が必要である。この意味において、形式論理学の中の虚偽論の中の二、三について意見を述べ批判を請いたいのである。

2. 論理学と弁証法

論理学と弁証法は、ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学のごとく、公理系を異にする純粋思惟の体系として並存し得るものであろうか。もし並存し得るものならば、公理的規約を異にする両体系から見ると、同一の思惟過程が、一方からは真、他方からは偽となり得ることもあり得るはずである。

マルクス主義者の垂流の極端なものからいわせると形式論理学はブルジョアの誤った論理学であり、弁証法こそ科学的社会主義の正しい論理学である。こうした主義者やイデオロジストのいう論理学は、学以前のものであって、ここでは取りあげない。自同律、矛盾律、排中律等の公理の上に立つ、形式論理学、数学的論理学、数学一般は、同質のものであって、これらの基礎の上に、他の一切の経験科学があるいは成立し、あるいは精密科学化され得るものであるから、これらは、いわば「科学の論理」と呼ばれ得るものである。したがって前述の公理は一切の諸科学の基礎となるものであって、これを否定するならば、その上に基礎づけられている一切の科学の殿堂は顛覆する。論理、数理はかくて科学のための論

理，数理であるが，弁証法は同じ資格をもつであろうか。

弁証法が科学の論理たり得るか否かを論ずる前に，まず論理，数理，科学を貫く一貫した原理を解明しよう。論理学の最初に来る公理は，自同律であるが，これを記号論理で表わせば $A \equiv A$ である。論理，数理，科学が成り立つためには，まず初めに自己同一者の規約を確認せねばならぬ。論理において $A \equiv A$ であったものは，数理においては $A = B$ となり，科学においては， $x = y$ となるが，結局において数理や科学においても，論理の自己同一者 $A \equiv A$ を A と B ， x と y の中に認めるのである。すなわち論理，数理から出発する科学の論理は，タウトロジーの論理であることを根本的に確認する必要がある。数理，論理，科学の真理は，時間を超越して同時存在の世界において常に自己同一性を保持することによって，虚偽とは，自己同一性を否定し，またしたがって無矛盾性を否定することである。自己同一性，無矛盾性の否定とは，換言すれば純粹思惟がその公理や公理に基づく思惟の諸形式を誤って論理計算を行なったために生じた規約破りの「誤算」である。数理，論理，科学の世界における虚偽とは，結局誤算というエラーであり，ミステークなのである。人間の操作に基づく虚偽であるから，いわゆる形而上学者のいう本質的虚偽ではない。したがってそれは操作を修正すれば，真理に転換し得る虚偽である。

さて形式論理学に対置される弁証法はどのような論理学であろうか。形式論理学と全く異なった規約を公理として成立するような別種の論理学があるであろうか。弁証法は，イデオロジストの立場から，有機体の論理とか，発展，生成，変化の論理とか運動の論理とか，矛盾の統一の論理とかいろいろの名で，呼ばれている。もちろん有機体も，発展や生成も，運動も無原理でなく，それを一つのパターンによって把えるためには，論理形式は存在するに違いない。しかし形而上学的思弁の残物を多分に包含しているイデオロジストの主張するような「正反合」の三位一体的論理が，科学の論理として通用するであろうか。

形式論理学は従来しばしばタウトロジー的形式主義の故に，弁証法論理を重視する人々から，無内容で実質的でなく，現実の解釈は何の果実をももたらさないものと非難された。もし形式論理学がタウトロジー的形式主義の故に，虚偽であ

り、無内容であり、現実を正しく解釈し得ないとするならば、現代の科学文明の基礎をなしている論理、数理を真に理解していないのである。形式論理学は前述のごとく、数学的論理学や数学一般と同じタウトロギーの形式主義の上に成立する同系列、同質の学である。科学一般はこのタウトロギーの形式主義を活用して、 $x = y$ の方程式により、「多様性の中に統一性」を求める努力なのである。実在は渾沌たる「多様性」に充たされたものであっても、その「多様性」の中から「統一性」を求める意志が科学の意志である。 x と y のイコールの中に人間の科学的意志が働いているのである。従来科学は知性の所産としての因集律の上に立つ故に、人間の自由意志を否定するかのごとき考えが、特にカントを頂点として伝統的に神話化されて来た。このことは、科学が進歩すればするほど、人間は自然から解放され、自由になっている事実と甚だしく矛盾する。科学と自由とは、何ら矛盾するのでなく、科学が人間を不自由にするとするれば、それは意志自体の内部の問題で科学には罪はない。

かようにして形式論理学やまたしたがって数学一般は、そのタウトロギー的形式主義の故にこそ、千変万化する多様な自然現象、社会現象の中に、自己同一性を発見し、これらに統一を与えることができるのである。科学は論理、数理のタウトロギーを利用して、渾沌たるカーオスの世界を斉整たるコスモスの世界に変えることができるのであって、これを否定すれば、およそ現代の科学文明は成立しない。弁証法論理が形式論理を否定しようとすることは、数理や科学一般を否定することに他ならないことを理解しているのであろうか。

さきに弁証法は、有機体の論理と呼ばれ、発展、生成、運動の論理と呼ばれることを述べたが、その限りにおいては、形式論理学や数学は何ら反対する理由はない。科学の重要な使命は、「未来の予測」にあることは、コントと共にすでに常識に属することである。時間を入れた考え方が一層現実に近い解釈であることに異論はない。したがって一切の科学の終局的判断が、人間の歴史的発展、生成に興味を有することは争えない。しかし科学はあくまでも「予測」を使命とするのであって、宗教のごとく、事実に責任を負わない「予言」であってはならぬ。弁証法は予測の論理というよりも予言の論理ではないであろうか。それは多分に

思弁的な宗教的予言ではないであろうか。

今日経済学、経営学のみでなく、政治学においてさえも、論理の世界から肯定と否定を、数理の世界から二進法を、電子工学の世界から、オンとオフの基本概念を導入して、電子計算機による「未来の予測」を立派に行なっているではないか。弁証法はどのような論理によって、未来社会を予言でなく予測することが出来るのであろうか。もしそれが不可能とすれば、弁証法は科学の論理でも歴史の論理でもあり得ない。

人間の世界観を、巨視の見地から分類して見るとミレトス学派のヘラクライトスのごとく、世界の本質を生成流転と見る考えと、プラトンやアリストテレスのごとく、永久不変のものと見る考えと二大別することが出来る。ヘラクライトスによれば、「万物は流れる。人は二度と同じ川の流れに足を入れることは出来ない」というに対し、プラトンは、真善美のアイデアのごとき存在は永久不変であると考え、世界の本質を永遠の相において見たのであった。すなわち前者は生成するものを、後者は永遠なるものを、世界の本質と見たのである。ヘラクライトスの弟子は、ヘラクライトスが「二度と同じ川の流れに」ということによって、概念的、論理的に規定したのに対し、厳密には「一度も同じ川の流れに足を入れ得ない」と一切の自己同一的なものを否定した。ヘラクライトスの弟子の主張は、論理以前、数理以前、概念的規定以前の世界を、直観的に見ていたのであって、ベルグソンの創造的進化のごとき形而上学の世界に属する。しかしさすがにヘラクライトスは直観の世界を概念的、論理的に規定しないで、直観そのままの世界では何ごととも表現し得ないと考えたのであろう。物自体と意識一般、直観と概念、主観と客観、因果と自由等多数の対立概念に悩んだカント哲学を綜合統一する必要から、ヘーゲル哲学は、弁証法に逃げ場を見付けた。しかもヘーゲルは歴史を絶対理性の自己展開と解したので、歴史に論理性を与える必要から、このカント的対立概念の矛盾の統一を行なう弁証法論理に頼らざるを得なかったのである。

歴史を生成、発展と見ることに異議はない。しかし生成発展を論理的に把握するために、三位一体的弁証法によって、対立の綜合を、「矛盾の統一」と解し、歴史の予測を正反合の三肢体パターンによってなし得るとする思弁の方法は、す

すべての科学者（歴史を経験科学として扱うすべての歴史学者をも含めて）の認めるところではない。歴史を科学と対立する、そして科学の全く手の届かない現象と考える形而上学者、ヘラクリトスの弟子のごとき概念規定を否定する直観主義者は別として、歴史を科学の世界にとり入れるためには、論理、数理の基礎の上に立たねばならぬ。ヘーゲルは直観主義者ではなかった。歴史に論理を導入しようとした。しかしその論理は弁証法の論理という、科学の論理の否定であった。それは近代科学の方法のごとく、歴史的事実について観察系の情報を十分にとり入れた上での論理ではなく、事実から遊離し、概念の中を空廻りしている論理であるから、思弁の論理である。特に弁証法が、科学の論理である形式論理や数理と根本的に異なるところは、弁証法を「矛盾の統一」の論理とすることである。

もし弁証法を有機体の論理、生成、発展、変化、運動の論理と呼ぶ限りにおいては、科学の論理と真正面から衝突する必要はない。弁証法が三肢体のパターンのごとき思弁的なものを用いない限りにおいては、生命体の論理としての有機体の論理も、歴史の論理としての生成、発展の論理も、機械学の論理としての運動力学もすべて必要であろう。しかし弁証法を「矛盾の統一」と規定するならば、科学の論理としての数理も形式論理も絶対にこれとは相容れない立場に立たざるを得ない。科学の論理は、タウトロギーの論理として、どこまでも矛盾を排除し、自己同一者を求めることは、すでに前にも述べた通りである。したがって弁証法の矛盾の統一とは一体何を意味するか。矛盾を容認する論理であるとすれば、科学の論理からいえば、虚偽を真理とする論理である。しかし一般に弁証法を主張するものは、概念的規定がルーズであって、厳密な論理学上の矛盾概念でなく、単に反対概念や関係概念を矛盾概念として乱用する傾向があるから、黒と白、親と子の概念を、有と非有のごとき矛盾概念と区別し、これらを論理的にいうなれば、別異であって、矛盾でないことを指摘する必要がある。（今田著 科学概論 153 ページ 関書院 参照）

3. 循環論証は虚偽であるか

自己同一者の論理を科学の論理とする立場から、虚偽の問題を論じて来たが、さらに古典論理学としての形式論理学が、自己同一者の論理に矛盾した点がないであろうかを引き続いて検討する。

多くの論理学書はその巻末に「虚偽」について述べ、虚偽に陥れる思惟によっては真理に到達することは出来ないから、この虚偽を一切排除せねばならぬといっている。さて古典論理学としての形式論理学が、伝統的に、無批判に論じているものの中に、あらためて検討するものがこの虚偽論の中にありはしないか。

最初から意図的に、虚偽を真理とし、黒を白とする詭弁は別として、一般に無意識の間に生ずる虚偽は、冷静な理性の論理計算でなく、激昂した感情のためとか、未熟で理性が未発達のためとか、思惟の混乱のためとか、を原因として正常な推理が行なわれない場合に発生する。虚偽を認識論上の問題にまで拡張すると当然、ベーコンの指摘した各種のイドラは、認識以前の条件に属する虚偽であり、素材的な虚偽であるが、「真実」の認識の成立にはこれらを一切排除すべきことはいうまでもない。しかしここでは主、客観の対応に関する真偽問題は、他日に譲り、主として自己同一性の論理を犯すことによって生ずる虚偽の問題を論じよう。

論理学の公理というべき自同律、矛盾律、排中律は固よりであるが、この上に立つ各種の推理形式を犯す場合には各種の形式的な論理学上の虚偽に陥る。たとえば間接推理に関していえば、四個名辭の虚偽とか媒概念不周延の虚偽とか、その他不当周延の虚偽、否定前提の虚偽、特種前提の虚偽、前件否定の虚偽、後件肯定の虚偽、選言不完全の虚偽等がある。これは要するに自己同一性を犯すことによって生ずる虚偽であるから、それが虚偽たることについては、何の疑いもない。しかし問題は次の虚偽である。

アリストテレスが、虚偽を分けて論理的形式を犯した場合の形式上の虚偽と、論理学以前の資料的内容的の虚偽としているが、論理学以前の問題を論理学の中で何故取り扱ったかの問題はここでは論じないが、論理学で取り扱った以上は論

理学の問題としてここに取りあげるならば、問題は後者である。アリストテレスは内容上の虚偽をさらに分けて、言語上の虚偽と言語以外の虚偽としているが、言語上の虚偽、たとえば言語曖昧の虚偽とか、音調抑揚の虚偽等概念の厳密な自己同一的定義の欠如から来るものであるから、これは、形式的虚偽に入れてさしつかえない。すると最後の虚偽は、「論点竊取の虚偽」等が残るが、本論文は自己同一性の論理から特にこの虚偽を批判の対象として、専門学者の批判を仰ぎたい。

論点竊取の虚偽は、一般的にいえば、不当仮定の虚偽ともいい得るものであって、その一つは、「先決問題要求の虚偽」であり、他の一つは「循環論証の虚偽」である。論点竊取は、証明を要するものを証明せずあらかじめ前提の中に仮定している虚偽のことをいうのであって、たとえば「聖書は神に由来する、故に聖書は神の言葉である」のごとく、神の言葉を証明すべき前提にすでにこれが仮定され、内含されているのである。論理学上の虚偽は本来形式上、規約上の虚偽であり、約束された形式や規約を守らず、純粹思惟の法則を守らないところから発生する。この立場から見れば上例のごときは果たして虚偽であろうか。それは「神に由来する」という一層高次の、そして外延のより広い概念を用いてはいるが、何ら無矛盾性や自己同一性の公理を犯しているものとはいえない。雑多なものの中から、自己同一性や無矛盾性の公理によって、等しいものを結び合わせ、連関性、連続性をつくり上げることが、論理計算であるとすれば、前提と結論は互いに支え合っているものであって、もっと分かり易い例でいえば、「経済学とは経済の学である」というと同じく、同語反復であるから、それをもって虚偽とはいえない。証明とか定義とかいわれる論理学の操作は、要するに一定の規約によって、一つ概念を他の概念に翻訳し、説明することなのである。上例のごときは、上手な翻訳、巧妙な説といえないかも知れないが、それは論理学上虚偽とはいえない。

循環論証についてもまた同様である。たとえば、「教育は良い公民をつくる。良い公民は学習によってつくられる。学習は知識の修得によって得られる。知識の修得のためには公民は皆教育を受けねばならぬ。教育は良い公民をつくるから

である。」というように、一連の推理過程を経て、結局出発点に帰ってくる論証の仕方である。証明せらるべき命題が同義語の形であらかじめ認められ、前提の中にすでに結論が含まれ、円形の推理が行なわれるのである。この推理もけっして論理形式を犯して、矛盾を主張するものでないから、虚偽とはいえない。およそ論理にしても、数理にしても、タウトロジーであるとすれば、論証はすべて循環論証であるべきであって、循環にあらざるものこそ虚偽というべきである。

すべて論理学上の操作は、定義にしても、説明にしても、論証にしても、実は根本的に循環でなければならぬ。それはタウトロジー論理の宿命の本質であって、かのアリストテレスの演繹推理にしても、ミルの帰納推理にしても、すべてこれ一種の循環論証である。古典論理学の立場で演繹推理を、形式化すれば、次のごとくなるが、前提の中にすでに結論は内含されているのである。すなわちSはPの中にすでに含まれているのであって、推理過程はすでに含まれているもの

$$\begin{array}{r} \text{凡} M = P \\ \text{凡} S = M \\ \hline \therefore \text{凡} S = P \end{array}$$

を取り出して来るにすぎない。これを次のように量的に表現すれば、一層SがPの一部なることが明らかになる。すなわちMを媒介としてSとPとの部分的自己同一性を導き出したものである。

$$\begin{array}{r} \text{凡} M < P \\ \text{凡} S < M \\ \hline \therefore \text{凡} S < P \end{array}$$

帰納推理はその発生の原因が演繹推理と異なってい

$$S < M < P$$

るので、多少循環論証の性質は異なっているが、結論と前提との間に、仮定関係が内含していることには変わりはない。帰納推理の論理計算が演繹推理のそれに比し多少性質を異にしているのは、演繹推理が純粹の形式的推理と考え、何ら新しい真理を発見しないタウトロジーと考えた人々の不満から、演繹推理は逆立ちした推理であって、前述の三段論法の形式では、「すべてのMがPである」という命題は、実は逆に個々の事実を集めてその上に成立した全称命題であって、個物が本来さきであることに着目して生まれたものである。そのみでなく、この個物は概念の世界内のタウトロジー的空廻りでは新しい真理は発見されないの

で、実は観察、実験による実在を読み換えたものであった。近代科学が観察、実験を重視する立場から従来のアリストテレス的形式論理に満足せず、個々の実在

$$\begin{array}{l}
 S' = P \\
 S'' = P \\
 S''' = P \\
 \vdots \\
 \hline
 \therefore \text{凡 } S = P
 \end{array}$$

の経験を積み重ね、そこから普遍命題である全称命題を構成すべしとのベーコンやミルの主張から生まれたのが帰納推理であった。本来循環論証の外へ脱出するための論理であった。しかし帰納推理にも帰納推理の弱点があった。帰納推理を古典論理学の立場で形式化

して見ると次のごとくなる。観察、実験を重視しながら、点線の部分はこれを省略して直ちに全称命題に飛躍している。タウトロギー的演繹推理は形式主義といわれながらも、自己同一性と無矛盾は保持し得てきたから、虚偽の論理ではない。しかし帰納推理は観察実験せざるものをしたるものと仮定している故に、論理の飛躍であるのみでなく、悪しき不当仮定の推理でなければならぬ。これがもし實在との対応を論ずる推論でなければ明らかに帰納推理は虚偽である。しかしミルはこの難点を回避するために、「自然の斉一性」を論理の基礎に置いた。すなわち自然の斉一性を大前提とし、個々の事実をその特称命題とした故に、結論の「すべてのSはPである」は、自然の斉一性の同義語である。自然の世界においてタウトロギーを発見しようとするのが帰納推理の原理と考えねばならない。ラッセルは「近代科学は数学と経験論の結婚」によって生まれたと述べたが、演繹推理は数学や形式論理学の代表的な推理形式であり、帰納推理は、数学や形式論理学の純粹思惟と観察実験による個物の経験との対応の論理である。

4. 虚偽の種々相

真理を探究するのに正面から堂々と取り組むことも必要であるが、逆に虚偽を世界からなくして終えれば残るところは真理であるということも出来る。真理と虚偽は質的に考えると全く同一の次元においては相容れないものであって、正に記号的に表わせば $T \vee F$ というより他はないものである。しかしそうした場合、真とか偽とかは同じ立場から常に同じ意味で語られているであろうか。

この論文は、まず初めに、虚偽の概念を認識論上からいえば、「實在との対応性」の喪失を意味することを述べ、進んで形式論理学、数学的論理学（記号論理学）、数学一般は同系統の公理体系の上に立つ同種の推理形式であって、ここでは

約束された公理体系においては公理を犯さない限り、虚偽は生じないことを指摘した。したがって認識論と論理や数学と二つの立場から虚偽の意味を区別するとすれば、前者では「真実」に対する「虚偽」であり、後者では「真理」に対する「虚偽」である。さらに弁証法と論理学、数学との関係においては、前者が弁証法を「矛盾の統一」としての論理と解する限り、無矛盾性、自己同一性を公理とし、排中律を公理とする論理学や数学とは絶対に相容れない関係に立つ。論理学や数学が科学の論理であるとすれば、弁証法は絶対に科学の論理でなく、科学以前の呪術の論理でしかない。

最後に論理や数理は、自己同一性、無矛盾性のタウトロギーの推理形式を原理とする限り、形式論理学における循環論証のごときは、虚偽にあらざることを指摘し、論理、数理の本質を明らかにした積もりである。 (1968. 7. 31)

筆者紹介：

明治34年、奈良県に生まれる。大正15年、早稲田大学文学部哲学科卒業。昭和16年、早稲田大学教授。現在、亜細亜大学教授、図書館長。

主要著書：

『新弁証法研究』、『純粹論理学』、『科学概論』、『自尊の倫理』、『科学原理の哲学』、ヘーゲル『歴史哲学序説』、コヘン『カント純粹理性批判』。